

地域の歴史を追体験し、歴史を身近なものにする授業 —学校資料をもちいた〈この学校でしかできない〉自校史実践—

浅見 太暉

1. はじめに

すべての生徒が歴史を学ぶ意義を見出せる授業とはどのようなものか。本稿は、教職一年目の筆者がこの漠然とした問いから出発し、四苦八苦した実践報告である。

生徒が学ぶ意味を実感できる授業とするためには、授業内容と自分とをつなぐ足がかりとなる「何か」が必要となる。筆者は、勤務校の実態をつぶさに検討するなかで、郷土史や学校資料（自校史）をまじえることで、生徒が歴史を身近なものとして捉えると同時に、歴史を学ぶ意義を見出すことができるのではないかと考え実践した。

まず、このような実践にいたる経緯を簡単に記しておきたい。2022（令和4）年5月、教育実習生であった筆者は悪戦苦闘していた。経験に乏しく、つまらない授業をしていることを自覚していたため、放課後には教室に足を運んで、生徒から授業の良い点や改善すべき点を聞き取ることにした。そこで、教科書に掲載された歴史が「実生活と関連が薄くどこか遠い時代の偉人の歴史」と認識されていることを痛感した。また、「歴史は暗記科目」で「つまらない」という声もよく耳にした。たしかに、生徒は歴史を学ぶ意義を見出せずに、もしくは見出そうともせずに、穴埋めプリントに「重要語句」を書き込むことに終始しているように見えた。暗記

そのものを批判するわけではない。だが、定期考査の度に知識（用語）を詰め込んで吐き出すことを繰り返すだけでは、知識の定着はもとより、これを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力、また、興味関心に沿って主体的に学ぶ姿勢といった資質・能力は深まらないだろう。何か工夫が必要だと考え、「あらゆるものが教材となりうる潜在力を持っている」ことを念頭に〔奈須2012：49〕、学校の特色を活かした授業を展開することにした。教育実習校の埼玉県立秩父高等学校は、秩父地域唯一の普通科進学校であり、多くの生徒が秩父地域の中学校から進学してきている。このような学校の特性を活かすために、民俗学者桜井徳太郎の「歴史時代の人びとの生きた生活を知ることが、歴史教育上不可欠の要点」という視点に立ち〔桜井1989：9〕、郷土史をもちいるという授業を行った。生徒からは「教科書に書いてあることが、地元と結びついているという視点が新鮮だった」という言葉をもらった⁽¹⁾。筆者は、期せずして2023（令和5）年4月に秩父高校（以下、「本校」と記す）へと赴任することになった。教育実習時の手応えをふまえ、積極的に郷土史を教材に落とし込むことにした。

自校史については、筆者が高校三年生だった2018（平成30）年にまで遡る。日本史の教諭

が学校に戦時下の写真が残っていると教えてくれた。それまで秩父に戦争の影響などほとんどなかったのではないかと考えていた当時の筆者にとっては印象的な話であり、以来、将来的に秩父高校に教員として赴任したならば自校資料をもちいた授業を行いたいと構想を練っていた。以上のような個人的経緯もあり、学校資料をスムーズに教材化できた。

2. 学校資料を使用するねらい

ここでは、なぜ学校資料をもちいるのか、その「ねらい」について先行実践を参考にしながら整理したい。

そもそも、学校資料を教材化するという試みは目新しいものではない。先行実践では学校資料のどのような性質に着目したのだろうか。また、何をねらって自校史実践を行ったのだろうか。たとえば、野口孝は勤務校の『同窓会報』（1938年発行）に掲載された戦時下の学校行事についての実践のなかで、「国民精神総動員運動について、それがどのように展開されたか、学校という生徒に馴染みのある空間で、自分たちと同世代の若者がどのように取り扱われたのか、具体的に捉えさせることを心がけたい」とし、「この戦争がもたらしたことを含めて考えさせる絶好の機会となる」と教材化の意図を記している〔野口2012：187〕。會田泰範は博学連携についての文章のなかで「学校内に『眠っている』非現用となった『モノ』を掘り起こし再利用しようとするれば、それらは歴史学習の様々な場面で活用できる素材になり、実物を通して奥行きのある歴史教育を構築できる可能性」を指摘している〔會田2017：198〕。深

田富佐夫は、校友会誌に掲載された記事について「生徒として、教師としての建て前が全面に出ていることを前提に読み解くことはもちろん重要であるが、同時にそこには同時代の一般的な言説が合わせ鏡のように映し出されていると見ることもできるであろう」とその性質を整理した〔深田2019 a：181〕。また、「生徒にとって身近な素材を使いながら、遠い過去の出来事を自分のことのように思わせる工夫が授業者に求められているのではないかと提起し、実践のねらいとして、「生徒達に身近なものに感じさせ、その時代への共感を喚起」させることをあげた〔深田2019 b：111-112〕。

このように、校友会誌や校務日誌などの学校資料は、かつての自校の様子にとどまらず、当時における一般的な言説をも知ることができる貴重な資料である。ねらいの違いこそあれ、その点はどの実践にも共通しており筆者も首肯する。とはいえ、筆者自身の考えが無いわけではない。本稿では、筆者が学校資料を使用するねらいを本校の事情をふまえて三つ提示したい。

① 歴史を身近なものとして捉え、歴史を学ぶ意義を見出すこと

すべての生徒が歴史を学ぶ意味を見出すためにはどうすれば良いのだろうか。そもそも、生徒が歴史を学ぶ意義を見出すのはどのような場面だろうか。たとえば、星瑞希は「生徒が歴史を学ぶ意味を実感するのは歴史事象と現代社会の関連づけ、特に現代社会にも通ずる差別問題を学ぶ際である」とする〔星2023：58〕。本稿において報告する地域の歴史を迫体験し、歴史を身近なものにする授業は、星の言葉を借りる

ならば「歴史事象と現代社会の関連づけ」を意識した実践である。換言すれば、歴史を自分事として考える授業実践でもある。筆者は、生徒が歴史を学ぶ意義を見出すためには自分事として歴史を捉えることが効果的だと考える。この考えを補強するのは、レリバンスという視点である。二井正浩は、レリバンスについて「単に導入の工夫やエピソード、教師の機転などで子どもの関心をひき、『その気にさせる』といったレベルのものではない。歴史教育の構造を子ども自身の文脈や子どもの生きている社会とどう関連付けるのかという問題である」と指摘する〔二井 2022 : i〕。このように、小手先のテクニックではなく、生徒が生きる「いま・ここ」の社会と学習内容をどのように接合するのかという視点である。

本校生徒の大多数が秩父地域の中学校から進学することは先に述べた。とはいえ、少数ながら秩父地方に明るくない生徒も存在する。筆者が教育実習中から続けてきた郷土史をもちいる授業では、そのような生徒と秩父地域に生きてきた生徒との温度差が感じられていた。その点で自校史は、「いま・ここ」で学ぶ生徒自身と「かつて・ここ」で学んだ生徒とを結ぶものだ。秩父に生きてきた生徒にとっては郷土史のようなものであるし、そうでない生徒にとっても自分の身近に感じることができるテーマとなる。

② 教科横断的な視点を持つこと

学校の歴史はその地域の歴史でもある。本校は、令和5年度、県立高校学際的な学び推進事業「学・SAITAMA プロジェクト」の指定校として、総合的な探究の時間に地域についての

探究活動を行っている。自校史学習のなかで深化した学びを科目内にとどめるのではなく、それ以外の文脈においても活用できるような教科横断的な視点も身につけさせたい。

③ 本校だからこそできる実践を生徒に提示することで、生徒がこの学校で学ぶことに自分なりに意義を見出すこと。

やや勝手なものの言いだが、秩父地域は面積のわりに高等学校の選択肢が少ない。他の地域の学校に進学しようとするれば距離的・時間的な制約を乗り越えなければならない。ゆえに、本校でも、筆者がかつてそうであったように、近所だからなんとなく進学してきた生徒も見受けられる。

高等教育の事例ではあるが、立教大学では全学共通科目として「立教大学の歴史」が開講されている。この科目についての文章のなかで、豊田雅幸が「自校史教育の持つ意義および効果は、単に自校の歩みを知ることにとどまらない、様々な可能性を秘めている」と指摘するように〔豊田 2008 : 38〕、自校史は単に自校のあゆみを振り返るだけでなく、その歴史を追体験することで、アイデンティティ構築、地域への愛着、帰属意識の深化などにも寄与する可能性を秘めている。

以上が、筆者が学校資料をもちいる主な「ねらい」である。筆者が着任した時点で、本校では学校資料は活用されていなかったが、これらをふまえて学校資料の教材化に踏み切った⁽²⁾。

3. 実践紹介

一戦時下の学生生活を事例にー

自校史についての授業は、筆者が今年度担当している科目のうち、日本史B(3年・3単位)、歴史総合(1年・2単位)で実施した。

本稿では、歴史総合での主要な実践を記す。『学習指導要領(平成30年告示)』の大項目C「国際秩序の変化や大衆化と私たち」中項目(3)「経済危機と第二次世界大戦」のなかで計2時間、ともに知識構成型ジグソー法で実施した(表1)。

時	経済危機と第二次世界大戦(全7時)
1	世界恐慌【知識構成型ジグソー法=KCJ】
2	ファシズムの伸張【KCJ】
3	日本の対外政策【KCJ】
4	秩高史Ⅱ：日中戦争期の秩父高等女学校【自校史・KCJ】
5	第二次世界大戦の展開【KCJ】
6	秩高史Ⅲ：アジア太平洋戦争下の学生生活 秩父商業学校と秩父高等女学校【自校史・KCJ】
7	国際連合と国際経済体制【KCJ】
定期考査	

表1：単元計画

まず、生徒観を述べておきたい。筆者は、2クラス62名を担当している。本校生徒の特徴として幅広い学力層の生徒が在籍していることがあげられる。担当するクラスも例外ではなく、中学校での既習事項があやふやな生徒がいる一方で、歴史的思考力が十分に身につけている生徒もいる。全体的に活発な生徒が多く、授業でも教員からの指示に対して積極的に取り組んだり、他者と協同したりする。他者と学び合うなかで学力差を補完しあう姿勢が認められる。こ

のような生徒観を鑑みて、歴史総合の授業は多少の例外はあるものの知識構成型ジグソー法(以下、ジグソー法)で行っている。授業の基本的な流れは、以下の通りである⁽³⁾。

時間	生徒の活動
2	トランプを引き、所定の場所に座る
3	プレ記述
5	個人で課題に取り組む
10	エキスパート活動
15	ジグソー活動
10	クロストーク
5	再度MQに回答する

表2：基本的な授業のながれ(単位は分)

先に「歴史は暗記科目」で「つまらない」という教育実習中に聞き取った生徒の歴史授業観を示した。同様にして、年度当初のアンケートでは、歴史は「暗記できない」「覚えることが多い」から「嫌い」という生徒がクラスの半数程度いた。だが、田尻信壹は「今日では、歴史の事項や事象、概念を暗記させ、ペーパーテストで確認するような知識蓄積型・知識再生型の学習に対する見直しの声が高まってきた」と指摘する[田尻2017:33-34]⁽⁴⁾。このようななかで叫ばれたのがカリキュラム編成における、「何を学ぶか」(コンテンツベース)から「どのように学ぶか」「何ができるようになるか」(コンピテンシーベース)への転換である⁽⁵⁾。以上のように、単に暗記を強いる「知識蓄積型・知識再生型」の歴史授業は見直されてきている。これを鑑みて、年度当初から「歴史は単に用語を丸暗記してテストの度に吐き出すものではなく、資料を読み解釈するなかで過去と自分をつなぎ、未来に活かすものだ」と繰り返し声をかけ、高校の歴史授業は単なる暗記科目ではない

という授業観の形成に注力してきた。その結果、二学期末に実施した授業アンケートでは、ジグソー法授業について、回答者の93%が「満足」もしくは「やや満足」と回答した⁽⁶⁾。地域（自校）の歴史を迫体験するような授業を実施できたのは、このような授業観が形成できていたことも寄与していると思われる。

本校の歴史についても簡単に触れておきたい。秩父高校は、1907（明治40）年に創立された大宮町立裁縫女学校に起源を持つ県下有数の伝統校である。1950（昭和25）年、裁縫女学校の流れを汲む埼玉県立秩父女子高等学校（旧秩父高等女学校）と1937（昭和12）年に地域の商業学校として創立された組合立秩父高等学校（旧秩父商業学校）が統合され現在の秩父高校となった。授業では女子校を「秩父高等女学校（秩父高女・高女）」、男子校を「秩父商業学校（秩父商業・秩商）」と当時の校名に統一した⁽⁷⁾。

第四時 日中戦争期の秩父高等女学校

1937（昭和12）年7月、北京郊外の盧溝橋での日中両軍の衝突事件（盧溝橋事件）に端を発する日中戦争についての授業である。MQ（メインクエスチョン）は「1930年代後半に秩父高女で学んだ女学生はどのような生活を送っていたか？」と設定した。

エキスパート資料は以下の通りである。校友誌『ち、ぶ』5号（1938年）に掲載された記事を資料として使用して、当時の学生生活と戦争との関係を考えさせた。

〈エキスパート資料〉

- ♠ 「第八回卒業生に告ぐ」 学校長 石井潔
- ♥ 女学生の銚後美談
- ◆ 秩父高女における学校行事について（補足資料として『ち、ぶ』5号に掲載された校務日誌コピーを配付）

エキスパート資料♠

このエキスパート資料では、当時の学校長の石井潔による卒業式での式辞「第八回卒業生に告ぐ」を使用した。史料を一部引用する。

即ち私共国民は、我が皇国によって生み出され、我が皇国によって生まれ、始から我が皇国の歴史伝統によって生長させられて来たもので、皇国という巨大な生命の一環としてのみよくその存在の意義があり価値がある。（略）

私共は皇国という大生命の一分身としてこの大生命に奉仕し、滅私奉公、其の中に生き、その大生命に帰一することによって、はじめてその宏大なる価値に参與することが可能であり、お互いに一身を捧げて肇国以来の御稜威に生きることが最も尊き生活であって、個人の意義価値といっても、この皇国を離れては考えられないのであります。

『ち、ぶ』5号、pp.1-2

以上のような言葉をもとに、当時の社会状況や学生に求められていた理想像がどのようなものであったかを考えさせた。

内容は難解であり、特に「滅私奉公」や「皇国」といった語は、生徒にとって聞き馴染みのないものであったが、端末を利用して語の意味を検索していた。

エキスパート資料♥

『ち、ぶ』5号には特集「進め皇軍」が組まれており、多くの生徒が戦争についての思いを綴っている。このエキスパート資料では、ここに掲載された女学生の銃後美談を扱った。

重信幸彦は「しばしば、私たちはこのような『美談』言説を、ことさらに粉飾と演出を施したプロパガンダのためのフィクションに近いものとみなそうとする。特に、戦争に関する美談は、そのように捉えられがちでもある」と指摘する〔重信 2019：17-18〕。たしかに、国内に残された銃後の人びとによる美談を愛国のプロパガンダとして見なしてしまえば簡単だが、そのようなものに矮小化するのではなく、「はなから、国民を扇動するために、時代の理想像として脚色された単なるフィクションとしてしか捉えないのであれば、美談は、ただそれだけのものでしかなくなる。(略) 美談もまた、私たちの問いかけと想像力次第で一定のリアルな事実を語りかけてくる記録になりえるのではないか」という重信の立場を踏襲し〔重信 2019：19〕、「かつて・ここ」で学んだ学生がなぜそのような言葉を紡いだのかという視点で「いま・ここ」で学ぶ生徒に考えさせた。

エキスパート資料◆

このエキスパート資料は、野口実践 (2012)、深田実践 (2019 b) を大いに参考に作成し、授業内容を「生徒達に身近なものに感じさせ、その時代への共感を喚起」ことを目指した〔深田 2019 b：112〕。また、補足資料として、『ち、ぶ』5号に掲載された校務日誌 (1938 年度) をスキャンして切り貼りしたものを A 3 用紙に印

刷し配付した⁽⁸⁾。

本エキスパート資料では、現在は行われていないものの、かつては行われていた学校行事も積極的に扱った。たとえば、秩父高女では毎月一日に秩父神社へと参拝をしていたことなどを事例にあげた。深田は「今の時代に行われていないような学校行事をただあげていくだけでは、生徒たちも知らないようなことばかりで、『それは昔のことだから』ということで終わってしまいかねない」と懸念を示している〔深田 2019 b：116〕。ここでの問題は、現在行われていない学校行事の扱い方である。つまり、なぜそのような行事が行われていたかを考えさせる必要がある。そこで「今では実施されていない行事はなぜ行われていたのだろうか」という問いを立てることで、行事がなぜ行われていたのかという思惑を考えさせた。

他のエキスパート資料から導き出される当時の学生が思い抱く戦争観がどのように形成されたのかを深化させるためのキーとなる資料でもあった。

第六時 アジア太平洋戦争期の学生生活

本時はアジア太平洋戦争下の学生生活についての授業である。前述のように日中戦争勃発後の秩父高女の様子については前時でふれている。MQ は「アジア太平洋戦争期に高女・秩商で学んだ生徒と戦争の距離はいかほどか?」と設定した。

エキスパート資料は以下の通りである。校友誌『ち、ぶ』6号 (1941 年) に掲載された記事のほかに、太平洋戦争期に作詞作曲された秩父商業学校の校歌・行進曲、勤労働員時の写真な

どを使用し、戦況が悪化するなかで、自らの学び舎がどのように変化したのかを考えさせた。

〈エキスパート資料〉【参考資料1～3】

- ♠ 「1940年」の秩父高等女学校—女学生の銃後美談を事例に—
- ♥ 太平洋戦争期に制定された秩商校歌・行進曲について（音源あり）
- ◆ 高女・秩商における勤労動員について

エキスパート資料♠【参考資料1】

このエキスパート資料では、校友誌『ち、ぶ』第6号（皇紀二千六百年記念号）に掲載された皇紀2600年記念式典を中心に扱った。西暦1940年は皇紀2600年にあたる年であり、各地でその記念行事が行われた⁽⁹⁾。秩父高女も例外ではなく校庭で「2600」という人文字を撮影した写真が残されている。いくつかの資料をもとに、なぜ、このような人文字が作られたのかを考えさせた。また、本号に掲載された高女生が日中戦争について記した文章には、「破竹の勢を以て支那全土を占領」とある。これは泥沼の長期戦となった実際とは異なる描写である。なぜ、このような記述が見られるのか、メディアと戦争についての教科書記述をもとに、プロパガンダという視点から考えさせた。プロパガンダは既習事項であり、自校においてもその影響を受けたのだということに気づかせたい。

なお、太平洋戦争下の学生生活を扱う本時において、本エキスパート資料のみ、太平洋戦争が勃発する以前のことを扱っている。これは、どのような社会状況のなかで太平洋戦争へと突入し、時代が移りかわるなかで、どのような変化があったのかという視点を養うことを意図し

ている。

エキスパート資料♥【参考資料2】

1941年に作詞作曲された秩父商業学校の校歌、行進曲の歌詞を読み解く。校歌には「至誠奉公ひたすらに」「御国のために尽くすべし」、行進曲には「阻まむ者は薙て行く」「ああ戦わん勝戦」など当時の社会を象徴するような言葉が列挙されている。このような校歌や行進曲が盛んに歌われていた時期には、どのような学生像が理想とされていたのかを資料をもとに考えさせた。

くわえて、授業に際して、本校音楽科Y教諭に依頼し、『百年のあゆみ』（秩父高校、2007年）所収の楽譜をもとに音源を作成した。視覚による情報だけではなく、聴覚による情報もまじえて当時の様子を想起させることにした。音を使用するという試みは生徒から好評であったことを付記する。

エキスパート資料◆【参考資料3】

太平洋戦争期における勤労動員を扱う。全国の学校で勤労動員が行われたことは教科書にも掲載されている。秩父高女、秩父商業で学んだ学生も戦況が悪化するなかで近隣の工場へと動員された⁽¹⁰⁾。戦時中に秩父商業校長であった掛川騰の回想を主に使用した。以下に引用する。

第二次世界大戦への暗い影が押し寄せ、時局重大の時を迎え、（授業者：昭和）18年10月には教育に関する特別措置がとられ、商業学校は工業学校に移行され、戦時教育の自由さえも奪われた。生徒は軍事工場への出勤を命ぜられ昭和電工、秩

父セメント、日本ニッケル、学校工場附近の農家への勤労奉仕等の毎日だった。生徒のなかには予科練に入隊するものもあり、秩父神社に祈願し一同で送ったこともあった。職員も次々に召集され、この秩父まで空襲をうけ東京方面からの疎開者の入学も多くなった。 『七十年のあゆみ』p.54

資料を読み解くなかで、自身が学ぶ学校（の前身）でも学業の自由はなくなり、工場で勤務する日々であったことを学ぶ。この際、第四時に学んだ日中戦争の開戦時の状況とは学生生活の自由の度合いが異なることに気づき、戦局の悪化に伴って秩父の人びとを取り巻く環境がどのように変化したのかを考えさせた。

4. 考察ならびに今後の課題

(1) 成果物から

筆者は、ジグソー法での授業時には必ず授業プリントを回収し、目を通すようにしている。生徒の学びを見取り、次時につなげるためだ。本稿では、その成果物の記述を分析することで、歴史を身近に感じる授業となっていたのかを考察したい。ここでは、紙幅の都合から各時二名の記述を提示し、プレ記述とポスト記述を比較する。なお、研究倫理の観点から授業時に匿名を条件に実践報告等に使用する可能性があることを伝えている。

比較に先立って、生徒の学習に向かう姿勢の変化について触れておきたい。プレ記述については、年度当初から一貫して、①プレ記述に完璧は求めないこと、②学習のなかでどのくらい理解が深まったのかを見取るために重要な作業であることを伝えている。このような声掛けに

よって全員が何かしら記述する雰囲気を作り出してきた。プレ記述の時間には、既有知識がどの程度なのかを整理する生徒、また素朴なイメージを記述する生徒が多く、自校史実践においてもその傾向が見られた。ポスト記述については、年度当初には、基礎学力の高い生徒の解答を写すだけという生徒も散見された。二学期以降は自校史実践も含め、多くの生徒がエキスパート資料に積極的に取り組み、ジグソー活動では自分の言葉で相手に伝える努力をし、クロストークでも他者の意見を聞き取り、積極的に記述する生徒が多くなってきた。これを裏付けるものとして、二学期末に実施したアンケートの結果をみると、記述力の伸びを実感している生徒が多数いる。生徒の実感と実際が適合している場合も多いと思われる。

第四時 日中戦争期の秩父高等女学校

生徒 A

○プレ記述

今は全然不便（原文ママ）

○ポスト記述

（前略）昔の生活と今の生活を比べると、自分はいやだと感じてしまったが、昔の学生たちはイベントを楽しんでいたのかなと思った。やっていることは国の戦争のためだったとしても、学生たちは楽しんでいたのではないか。行事をこうして楽しむ心は今も昔も変わらないと感じた。

生徒 B

○プレ記述

家庭科など家庭に関することを主に学びながら生活していた。

○ポスト記述

皇国（日本）のために生活しろという国からの方針から、秩父高女生は戦争に関する防空の講和

や「母性の力」など家庭での意識などについての教育だった。現代と同じように様々なためになる講話があるが、昔は主に戦争のことで、戦争のための生活を送っていたのではないかと思った。(女学生がどう思っていたかはまた別)

生徒 A に限らず、プレ記述の段階では、多くの学生が日中戦争下の学生生活に対して「辛い」「自由がない」という素朴なイメージを抱いていた。また、生徒 B のように「良妻賢母」的な女性像などすでに学習したこととの関連を見出そうとする姿も見受けられた。

エキスパート活動で資料をつぶさに検討するなかで、多くの生徒が、校長講話にみえる「滅私奉公」という語が当時のキーワードであり、秩父高女の学生にもその理想が押しつけられていたが、同時に部活動・運動会・遠足など現在の自分たちと同じような生活も送っていたことを理解した。

ポスト記述では、多くの生徒が、プレ記述での「辛い」「自由がない」について、具体的に「どのように」を記述することができていた。また、「辛い」「自由がない」というイメージは一面的なものでしかなく、銃後に生きる「かつて・ここ」で学んだ女学生は戦争という時局の影響を受ながらも、「いま・ここ」で学んでいる自分たちと同じような青春を送っていたのだという生きられた歴史像を獲得した生徒も多くみられた。

第六時 アジア太平洋戦争期の学生生活

生徒 C

○プレ記述

近かった。戦争中心の生活

○ポスト記述

マスメディアによる日本はゆうせいだという情報から、学生は日本が勝利するために、軍備品をつくったりした。そのため労働の日々となり、国のよゆうがなくなるにつれ、生徒たちの自由はなくなった。

確かに、戦争で不安なときにマスメディアで安心するような情報を流されるとそれを信じてしまうと感じた。私達が今、学んでいるのは日本が平和であることで成り立っていると感じたため、とてもありがたいことだと思った。日本のために働いているのにそれがむくわれないのは、とても残こくだと感じた。

生徒 D

○プレ記述

とても近かったのではないかと(日中戦争下でも近かったと思ったため)

○ポスト記述

校歌や教育によって戦争を正当化したり、国のために作ることを必然としたりすることを洗脳していて、時にはマスメディアが嘘を流すこともあった。その中で戦争による人員不足で工場で働かされたり、中には出兵させられることもあり、教育が十分に受けられなかった。それにより戦争との距離はとても近く、それを疑うこともほとんどなかったのではないかと感じた。

第四時で日中戦争期における自校の様子を学習していることもあり、プレ記述の段階では、生徒 C、生徒 D に限らず、第四時での学習を意識した記述が目立った。また、MQ が「距離はいかほどか」という抽象的なものになっていたために、単に「近い」「遠い」といった記述にとどまる生徒が多く見られた。問いの精練は今後の課題である。

ポスト記述では、生徒Cに限らず、第四時で学んだ日中戦争が勃発当初の状況からの推移に着目して、銃後の学生生活は戦局が悪化するなかで自由を失っていったことに触れた生徒が多くみられた。また、生徒Dのように当時の学校で求められた理想像に着目して戦争との距離を整理した生徒も多く見られた。特に、この時期に作詞された校歌に「御国のために尽くすべし」、行進曲に「阻まむ者は薙て行く」「ああ戦わん勝戦」などとあることから戦争が日々の生活に浸透していたと解釈した生徒が多かった。

普段の授業では感想を書かせることはしないが、進度が速い生徒はこの問まで取り組み、現代の自分におきかえて考えてほしいという意図から自校史実践では「今を生きる秩高生のみなさんは、戦時下の秩高生についての授業を通じて何を感じましたか？」という問もプリントに併記した。多くの生徒がこの【+a】の問いまで到達し、「自分ならどうするか」自分事として歴史を捉えることができていた。ここから、授業者の視点では、「その時代への共感を喚起」させることができていく（ように見える）生徒が多く見られた。

この「自分ならどうするか」という問いは、歴史のifを問うものである。従来、歴史教育のなかで「たれば」を語ることは避けられてきた⁽¹¹⁾。だが、中村怜詞は「新学習指導要領にあるような主体的な学びを実現するためには、この（引用者註：『自分ならどうするか』という）問は非常に重要である」と指摘する〔中村2019:229〕。中村の指摘にもあるように、「主体的な学び」を実現するという点でこの問いは有用である。もちろん、「自分ならどうするか」

という問が、そのまま「主体的な学び」につながるわけではないだろう。とはいえ、自らの学び舎の歴史を追体験し、歴史を身近に感じるといった実践の目的にも合致しており、実践をより効果的にする問いであると考えている。

小括すると、授業者の視点では、自校史をもちいることは、生徒が歴史を自分事として捉え考えることに寄与しているように思われる。

(2) 授業アンケートから

生徒は自校史実践について何を思ったのだろうか。そこに授業者の感覚とのギャップはどの程度あるだろうか。生徒の率直な感想や意見を集めるために二学期末に授業アンケートを実施した。生徒は一人一台の端末を有しているため、Google formsで作成したものをGoogle Classroomで共有した。自校史については「授業中に郷土史（秩父史）・自校史を扱うことについての率直な感想を教えてください」という質問項目を設定した。回答は「1. 不満」「2. やや不満」「3. 普通」「4. やや満足」「5. 満足」の択一式にした。つづけて、「そのように回答したのはなぜですか？」と質問し、こちらは記述式で回答させた。欠席者をのぞいた57名が回答した。

次頁のグラフ（表3）はGoogle forms上で作成されたものに加筆したものである。

授業アンケートのなかでは、自校史実践について「満足」と答えた生徒は27名（47%）、「やや満足」と回答した生徒は12名（21%）であった。ここから回答者のうち68%にあたる39名が多少なりとも自校史実践について満足と感じていることがわかる。回答の理由としては、自

校史を教科書内容と結びつけることでより理解が深まったという旨の意見が多く見られた。たとえば、「自分の地元の歴史について知って、より日本の歴史について密接に関われたから」「身近だと思っていなかった戦争と、自分が通っている高校の関係性が見えたから」のようなものである。先に成果物について分析したが、アンケート結果からも、比較的多くの生徒にとって自校史実践が歴史を学ぶ意義を見出すことにつながったことが示唆される。

一方で、「不満」と答えた生徒はおらず、「やや不満」と回答した生徒は1名(1%)で、理由としては「興味がない」との回答であった。また、「普通」と回答した生徒は17名(30%)であった。この17名の内訳としては、少数ではあるが、「なんとなく」という消極的な意見も寄せられた。その他は、テーマ自体は面白いが、ほかの授業のほうが興味を持てたという旨の意見が大半を占めた。たとえば、「普段やらない分息抜きにもなるし面白いが自校史よりほかの授業の方が私は好きだから」のようなもので

ある。ここで留意したいのは「普通」と答えた生徒の多くは、歴史総合の授業自体には面白さを感じていたということだ。しかし、自校史授業に普段の授業を上まわるインパクトを感じることはなかった。ここに教員の抱く印象と生徒が持つ感想とのギャップがある。歴史を自分事として捉える絶好のモノとして先行実践でも使用されてきた学校資料ではあるが、生徒がどのように受け止めているのかについては、より詳細に検討する必要がある。

(3) 実践の今後について

自校史実践を満足に感じた生徒が比較的多いとはいえ、筆者が想定したような、授業に参加するすべての生徒が歴史を学ぶ意義を見出せ(たと思え)る授業とまではいかなかった。前提として、すべての生徒が興味関心を寄せるテーマなどないだろう。であるにしても、生徒の学びを見取り、生徒が躓いた部分などを多面的に把握し、今後の指針について工夫や検討を重ねて授業を改善していく必要がある。

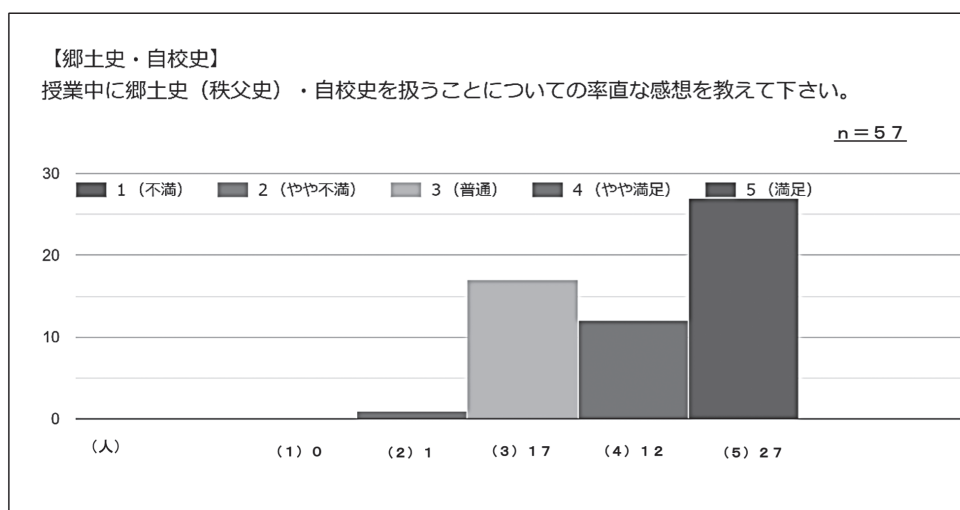


表3 アンケート調査

今後の課題を整理し自校史実践をより良くするための見通しを示す。先に示したように、教員が学校資料に抱くレリバンス構築への期待や実感と生徒の興味関心や満足度は必ずしも合致しないことがままある。つまり、学校資料の活用がそのまま生徒の深い学びにつながるわけではない。本稿では、実践の紹介、また成果物やアンケート結果の簡単な分析にとどまり、生徒ひとりひとりについて詳細な検討をくわえることができなかった。ゆえに、いまここで無理に結論づけることはせずに、今後は、アンケートで自校史実践について「普通」と答えた生徒の多くに共通する「ほかの授業のほうが興味を持てた」という意見にその突破口を見出してみたい。その過程で必要となるのは、自校史実践について「普通」や「やや不満」と答えた生徒が授業をどのように意味づけているのかについてのより詳細なデータである。示唆に富んだ先行研究として、知識構成型ジグソー法の歴史授業を生徒がどのように意味づけるのかを検討した星(2023)がある。調査協力者が勤務する高校で研究者として対象生徒を参与観察した星と勤務校の生徒を対象に分析する筆者との立場の違いこそあるが、大いに参考にして生徒の思いや考えをより詳細に把握しながら適切なアプローチを検討していく。

5. おわりに

本稿では、地域の歴史を追体験し、歴史を身近なものにすることを目的とした授業実践を報告した。新卒初任教員の拙い実践であり、残された課題は多い。とはいえ、生徒の記述を分析すると、多くの生徒にとって、自らの学び舎が

戦時下においてどのような状況にあったのかを認識し、歴史を自分事として捉えるきっかけにはなったと考えられる。また、アンケート結果から身近な事例によって、多くの生徒の興味関心を多少なりとも引き出したのではないだろうか。

いかなる授業実践も万能ではない。筆者は、一年間の学びを通して何か資質・能力を身につけ成長できたと実感できるような授業を目指している。郷土史や学校資料を教材としてもちいるのは、これに寄与すると考えているからであり、あくまでその手段にすぎない。だからこそ、手段が目的となること、つまり、郷土史や自校史をもちいた実践が、教員が抱く理想を押しつけることになってはならないと自戒したい。ひとつの手法に固執すれば、視野が狭まり眼前の生徒を置き去りにする蓋然性が高まる。とはいえ、アンケートには「また郷土史やってほしいです！秩父や秩高の歴史もっと知りたいです」という声も多く寄せられた。教育実習時に聞き取った、教科書の歴史＝「実生活と関連が薄くどこか遠い時代の偉人の歴史」という素朴な認識に揺さぶりをかけ、歴史を身近なもの(自分事)として捉えられたとすれば、本実践は今後も続けていく価値があるといえるだろう。今後も、自校史や郷土史をまじえた「この学校でしかできない実践」⁽¹²⁾を生徒に提示することは続けつつも、さらに歴史を学ぶ意義を見出させるような授業の切り口を模索していきたい。

最後に、授業について忌憚のない意見をくれる生徒のみなさん、無理なお願いにもかかわらず音源を快く作成して下さったY教諭に記して感謝を申し上げ擱筆する。

【註】

- (1) 詳しくは、教育実習の記録である拙稿「聞きに行く勇气」『教職研究』40号、pp.71-73. を参照いただきたい。
- (2) ただし、本校において自校史が見向きもされなかったとするのは早計である。たとえば、かつて存在した社会部の研究紀要『秩父盆地』第53号(1995年)には特集「戦時下の生徒達：秩父高等女学校・秩父商業学校」が組まれている。
- (3) 知識構成型ジグソー法については、三宅なほみ他『協調学習とは』(北大路書房、2016年)などを参照。
- (4) これらを二者択一のものとして捉えるべきではない [胸組 2023]。
- (5) 田尻は、1978～1992年度にかけて本校に在職した [田尻 2013：197]。
- (6) より詳細に記す。回答者57名、「満足」32名(56%)、「やや満足」21名(37%)、「普通」4名(7%)、「やや不満」0名、「不満」0名(0%)という結果であった。
- (7) 年度当初の短縮授業時に今昔マップ (<https://ktgis.net/kjmapw/>) を活用し「秩高史Ⅰ：現在の校舎が建つ前、この辺りはどのような土地だったのか」を実施した。その際、生徒には本校の歴史を講義しており、すでに「高女」や「秩商」といった略称も通じる状況となっていたことは付記しておきたい。
- (8) 一年分の校務日誌を一枚に集約したことで、印字が小さくなり見にくくなってしまったという難点があった。対策としては、Google classroom を利用して生徒の端末

に配信することで、手元でも参照できるようにした。

- (9) 『紀元二千六百年祝典記録』を参照。
- (10) 『新編埼玉県史 通史編6 近代2』などを参照。
- (11) たとえば、中村怜詞は「従来、歴史教育の中で『たれば』を語ることはあまり価値づけられていなかった」と指摘している [中村 2019：229]。
- (12) 詳細は別稿に譲るが、自校史実践のほかに「本校でしかできない」を明確に意識した授業として、日本史Bで秩父事件を扱った。なお、郷土史を扱うといっても一時間かけて扱うことは減多になく、必要に応じて自身のフィールドワークの成果を授業内容と関連付けるなどして、秩父の歴史、地理、民俗を示している。

【参考文献】

- 會田泰範 (2017) 「学校資料を活用した博学連携による歴史学習の実践」永松靖典編『歴史的思考力を育てる』山川出版社、pp.192-200
- 紀元二千六百年祝典事務局 (1943) 『紀元二千六百年祝典記録』9・12冊、内閣印刷局
- 埼玉県編 (1989) 『新編埼玉県史 通史編6 近代2』埼玉県
- 埼玉県立秩父高等女学校学友会編 (1938) 『ちぶ』5号、秩父高女学友会
- 埼玉県立秩父高等女学校学友会編 (1941) 『ちぶ』6号 (皇紀二千六百年記念号)、秩父高女学友会

- 埼玉県立秩父高等学校校史編纂委員会編(1980)『七十年のあゆみ』秩父高校
- 埼玉県立秩父高等学校百周年記念誌編纂委員会編(2007)『百年のあゆみ』秩父高校
- 桜井徳太郎(1989)「歴史教育と民俗学」日本民俗学会編『民俗学と学校教育』名著出版、pp.2-11
- 重信幸彦(2019)『みんなで戦争－銃後美談と動員のフォークロア』青弓社
- 田尻信壹(2013)『探究的世界史学習の創造』梓出版社
- 田尻信壹(2017)『探究的世界史学習論研究』風間書房
- 豊田雅幸(2008)「自校史教育の持つ可能性」『大学教育研究フォーラム』13号、pp.35-38
- 中村怜詞(2019)「地域と関連させる世界史探究の授業」前川修一ほか編『歴史教育「再」入門』清水書院、pp.224-229
- 奈須恵子(2012)「教材を研究し、授業の準備を行う」奈須恵子、逸見敏郎編『学校・教師の時空間』三元社、pp.46-63
- 二井正浩編(2022)『レリバンスの視点からの歴史教育改革論』風間書房
- 野口 孝(2012)「学校行事と国民精神総動員運動」埼玉県高等学校社会科教育研究会歴史部会編『日本史授業で使いたい教材資料』清水書院、pp.185-187
- 深田富佐夫(2019 a)「学校史編纂と学校資料－私立成田高等学校の事例」地方史研究協議会編『学校資料の未来』岩田書院、pp.171-187
- 深田富佐夫(2019 b)「日中戦争下の学校行事を知り、現在と重ねあわせて考えあう」加藤公明ほか編『考える歴史の授業(下)』地歴社、pp.111-116
- 星 瑞希(2023)「中堅高校の1年生は知識構成型ジグソー法を用いた歴史授業をいかに意味づけるのか」『北海道教育大学紀要(教育臨床研究編)』74巻1号、pp.45-60
- 三宅なほみ、東京大学 CoREF、河合塾編(2016)『協調学習とは一対話を通して理解を深めるアクティブラーニング型授業』北大路書房
- 胸組虎胤(2023)「コンピテンシーベース教育の意味と教科教育が果たす役割」『鳴門教育大学紀要』38巻、pp.34-45

参考資料 1

歴史総合 No.29 自校史◆

扶史Ⅲ：アジア太平洋戦争下の学生生活【扶史高女・扶商の美談・校歌・勲功勳員を事例に】

番 氏名： _____

MQ アジア太平洋戦争時に高女・扶商で学んだ生徒と戦争の距離はいかほどか？

資料①「皇紀」とは、どのような資料か？

資料②「扶史高女で行われた『皇紀2600年記念事業』」

右の写真は、西暦1940年に扶史高女で撮影されたものです。この「2600」という数字は何を意味しているでしょう。全校校史でのような入文字を作ることにどのような意図があったのでしょうか。このエッセイで資料では、「1940年」という年の特殊性、当時の雰囲気とそれを創り出した（または生み出した）のは何かをたのみに考えていきましょう！

資料③「皇紀」とは、どのような資料か？

特撮にもどろき、初代天皇とされる神武天皇の即位が西暦660年に行われたとい、この年を日本の建国元年とする紀年法(神武天皇紀元、皇紀ともいわれた) 吉川隆久「皇紀・万葉・オリンピック」中公文庫

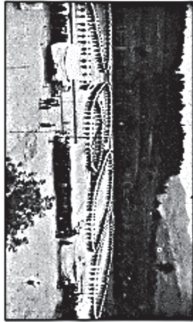


図1 「入文字」2600 (扶史高女校歴、1940年)

資料④ 扶史高女で行われた『皇紀2600年記念事業』

- ・韓国農場 → 韓国農場一段七畝妙設置又
- ・植 樹 → 校庭に桐5本・梅40本ヲ記念樹トシテ樹齡又
- ・記念貯金 → 昭和11年(略)卒業生ヨリ募金セシテ、(略)記念貯金トス
- ※紀元二千六百年奉祝式(校歴)、強歩大会(扶史特社—三峰神社)

【紀元二千六百年奉祝式】(昭和10年) 1941年 奉挙に成行

【注】 図1の出版は、図2に示した校友会誌『ちゅうが』第6号です。この冊子には「皇紀二千六百年記念誌」とあります。この「皇紀」とはどのようなものですか？

【図1】を参考にまとめてみましょう！

【+α】1940年は「皇紀」といって書かれます。どのような年と書えますか？



【注】『ちゅうが』第6号(1941年7月1日発行)

部大◆

資料⑤ 「1940年」当時の扶史高女生が記した文章【祖国日本の使命】(M・Y)

悠久ここに在る皇紀二千六百年の(略)大勢に生れあはれたる我ら、二度とない事も出ない事を望むたのです。私達は、何と不幸な朝に生まれあはれたのでせう！昔し皇國の命を記すべき年でありましたが、日本では昔の朝の如くに運命としてあります。是き、そして何故か運命を運ぶる所高女使命の下に、アジアの盟主、吾、世界の盟主たるべき日本は敢然と我らとて皇紀三年の朝月を照れまします。皇國は運命を運ぶる所高女使命と、それこそ我々の使命を以て我ら高女を占領しつつあります。そして扶日・白の日の思想に燃えたる我々の『白の旗』ここに新しき我ら高女の命を掲げて正義の道に立ちたはれ、我ら高女は、我ら高女の命を運ぶる所高女使命と、それこそ我々の使命を以て我ら高女を占領しつつあります。今や世界をあげての戦争となりました。我々の使命は、非常な戦争をもって、進軍しております。そして世界戦争の為に、三つの國地帯もて争いあはれたるのです。お互いの民族の共通の為に！我々も「天國」陛下におかれれば、この同盟に對して我ら高女の命を運ぶる所高女使命と、それこそ我々の使命を以て我ら高女を占領しつつあります。その強い決心を掲げ、我ら高女は我ら高女を占領しつつあります。

【注】 図1を参考に、印象に残った部分に下線を引こう！

資料⑥ 図1を参考に、印象に残った部分に下線を引こう！

資料⑦ 日本戦争は終わりの見えない泥沼の長期戦にわたる中にも関わらず、図1では、果たかも「勝利」の旗を掲げているような印象を受けます。この女生生に何らかの理由が隠れているように見えます。これはなぜでしょうか？

資料⑧ 戦争とマスメディア

戦争に付する世論の関心が増すなか、発行部数をのばすために戦争報道が盛んになった。日本戦争のころからは、マスメディアを使って国民の戦意高揚をはかられた。日本開戦に向かう世論の形成にマスメディアは大きな役割をはたしていたのである。太平洋戦争開始後の戦争のようすを報道したが、実際よりも日本の優勢をアピールしたり、特攻や戦死者をたええるように報じたりした。マスメディアが戦意高揚やプロパガンダに用いられることは、日本に限らず、世界各地で見られた。『高女学校歴史総合』p.154

【図1】を参考にまとめてみましょう！

【+α】あなたは、戦争中と同じような状況、同じような立場だったと仮定してどのような文章を書きますか？

問題をもととして、他の資料をもっている人に説明できるように整理しておいてください！

【♥・◆・◇】←丸を付ける

【♥・◆・◇】←丸を付ける

【メモ欄：短くて一つの感想をまとめてみる】

【メモ欄：全体共有(クロストーク)で得た新しい視点】

MQの考えを自分の言葉で考えてまとめてみよう！

【+α】字を並べるのは高女のみかあなたは、戦争下の高女生についての想像を添えて何を感じましたか？

参考資料 2

歴史総合 No.29 自校史 ● 組 番 氏名：
秩高史Ⅲ：アジア太平洋戦争下の学生生活〔秩父高女・秩商の美談・校歌・勤労勸励を事例に〕

MQ アジア太平洋戦争期に高女・秩商で学んだ生徒と戦争の距離はいかほどか？

動画のダウンロード資料をダウンロード

● **太平洋戦争期に制定された秩商校歌・行進曲について**

秩父商業学校校歌

作詞 野口 雨情
 作曲 権藤 円立

秩父三山 峰遠く
 至道巒公 ひとすらに
 天恩深く 思ふべし
 天恩深く 思ふべし

協同恋愛 つとめつつ
 人相共に 聖んじて
 朝夕つとに はげまなん
 朝夕つとに はげまなん

剛健快活 身を練へ
 自衛自活を 自覚して
 御国のために 尽くすべし
 御国のために 尽くすべし

聖先賢行(自ら学ぶ)の行事を行うこと 明らかな
 卑劣秩父の 我が校は
 善れも高く 類かむ
 善れも高く 類かむ
 (昭和16年4月10日制定)

秩父商業学校行進曲

作詞 富田幸太郎
 作曲 権藤 円立

萬古裡がぬ 聖山山
 久遠の流れ 聖川や
 空想の雲 秩父なる
 空想の雲 秩父なる
 深き望みに 集ひたる
 我々の意気は 天を衝く

秩商五百 男の子等は
 皆熱血の 権心なり
 麗き顔えま 聖国の
 力を頼みま 返られたる
 この栄光と 教習に
 我等の血潮 建るなり

ああ黎明の 鐘鳴りて
 商士の使命 告ぐる時
 友よいざ立て 手を取りて
 眞の道を ひとすらに
 阻まむ者は 踏て行く
 我等の行く手 遠きかな

種く御座候威仰きつつ
 八咫一字はつこいぢや、お世界を一つに 聖國の
 はるけき理想 受け継ぎて
 ああ秩父の 歴史
 名譽の歴史 築るべし
 我等の使命 聖きかな
 (昭和17年1月8日制定)

【主文】 校歌・行進曲ともに「戦争」をテーマとして作詞されています。それがどのように表現されているのか、その理由を説明してください。

【主文】 課題1で下線をついた理由を記入してください。その理由が「戦争」と関連付けられるとどう思いますか？

記入欄

【主文】 校歌や行進曲を分析し、求められていた思想的な「秩父商業主義」はどのようなものだったといえますか？

【+α：なぜ、そのような表現が用いられていたのか？】
 という主張。

【主文】 校歌や行進曲といった音楽は、戦時下において、どのように利用されたと考えられますか？【思考】

記入欄

【主文】 課題をもとにして、他の資料をもっている人に説明できるように整理してください。

【主文】 課題をもとにして、他の資料をもっている人に説明できるように整理してください。	【主文】 課題をもっている人に説明できるように整理してください。
---	----------------------------------

【+α：なぜ、そのような表現が用いられていたのか？】
 という主張。

記入欄

参考資料 3


歴史総合 No. 29 自校史 ◆ 編 番 氏 名：

【 扶高史Ⅲ：アジア太平洋戦争下の学生生活【秩父高女・秩面の美談・校歌・勤労動員を事例に】】

MQ アジア太平洋戦争期に高女・秩面で学んだ生徒と戦争の距離はいかほどか？

【出典】『戦時下の女子学生生活』

◆高女・秩面における勤労動員について



◆高女学生 (秩父高女) ◆セメント工場 (秩父) ◆日本セメント工場—職員と秩父高女学生

太平洋戦争の開始後、政府は民生生産の工場を軍需工場へ転用するなど民生生産優先政策をとる一方、国民に対しては生活を過度に切り詰めて戦力・労働力として戦時そと動員した。1943 (昭和18) 年には、大学・高等学校および専門学校に在学中の勤労動員対象学生を軍に徴集 (学徴出陣) する一方、学校に在籍する学生・生徒や女子挺身隊を編制した女性を軍需工場などで働かせた (勤労動員)。

【注】『勤労動員』とはどのような制度ですか、など、学生が「勤労動員」されなければならなかったのでしょうか。

【用語】

【ヒント：戦時によって何が変化したか】

【注】 以下は、高女・秩面生の勤労動員についてまとめたものです。どの集録に集中していませんか？ そればなぜでしょうか？

学校名	学年	人数	勤 労 動 員 先	年 度 (昭和)
秩父高等女学校 (秩父高校)	1～3年	300	秩父セメント工場、昭和電工秩父工場、若林航空工業学校工場 (陸軍被服廠)	
秩父商業学校 (秩父高校)	4・5年	41	昭和電工秩父工場	19. 7～

【出典】『戦時下の埼玉県』『新編 埼玉県史』

【秩父商業第二代校長 掛川隆の回想】

第二次世界大戦への強い影が押し寄せ、時局重大の時を迎え、(ア)ミ：昭和18年10月には教育に関する特別措置がとられ、商業学校は女子学校に改行され、戦時教育の自由さをも奪われた。生徒は軍需工場への出勤を命ぜられ昭和電工、秩父セメント、日本セメント、学校工場附近の商家への勤労奉仕等の毎日だった。生徒のなかには資料集に入籍するものもあり、秩父神社に祈願し一冊で送ったこともあった。職員も次々に召集され、この秩父まで空襲をうけ労務方面からの疎開者の入学も多くなった。

埼玉県立秩父高等学校『七十年のあゆみ』p.54

掛川校長の回想を感んで、戦争の影響が分かる部分に下線をひき、秩父商業生と戦争についてまとめてみましょう。

【注】 掛川校長の回想を感んで、戦争の影響が分かる部分に下線をひき、秩父商業生と戦争についてまとめてみましょう。

問題をもとにして、他の資料をもっている人に説明できるように整理しておくください！

【♥・◆・♦】←丸を付ける

【♥・◆・♦】←丸を付ける

【♥・◆・♦】←丸を付ける

【♥・◆・♦】←丸を付ける

【×】：欄：全体共有 (ワロストーク) で得た新しい視点】

【×】：欄：班でひとつの意見をまとめる】

MQの答えを自分の言葉で考えてまとめたか？

【×】：今までの答えと扶高生のかたは、戦時下の扶高生についての授業を通じて何を学びましたか？